



Title	北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター 第49号
Citation	https://doi.org/10.24484/sitereports.141489
Issue Date	2025-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/93995
Type	bulletin
Note	特集 繰り返された選定地
File Information	newsletter_49.pdf



[Instructions for use](#)

占いによる適地の選定

藤原道長の記した日記「御堂関白記」では、寺院の御堂を建立する適地を占いによって決めたことが書かれています。

寛弘元(1004)年2月19日、藤原道長は、京都宇治の淨妙寺で三昧堂を建てるに当たり、安倍晴明を含む陰陽師に占いをさせて、河川近くの平坦地を選定したと記しています。

擦文文化と重なる11世紀において、適地を進言することは陰陽師の役割の一つであったようです。

「安部清明公御神像」 京都市・清明神社蔵
斎藤英喜、2004. 安倍晴明、ミネルヴァ書房の口絵から引用。



第14回遺跡調査成果報告会の開催の案内

当センターでは、2025(令和7)年2月24日(月・祝)の午後に、2024(令和6)年度の調査成果報告会を実施します。

内容は、2024(令和6)年度に、当センターが北大構内で実施した発掘調査などを、本センター員が紹介・説明する第1部と、本年度の発掘調査で明らかになった、続縄文文化後半の遺構・遺物をより良く理解するための講演会である第2部に分けられます。

本事業は、市民の方々に、北大構内の遺跡を紹介、説明する目的で開催をしています。関心のある方は、是非、ご参加ください。

開催案内ポスター ▶

第14回 北海道大学埋蔵文化財調査センター 調査成果報告会

令和7年2月24日 月・祝 開場 13:00 ~
開始 13:30 ~

北海道大学構内では、本年度、サクシコトニ川治いのK39遺跡こども本の森地点において発掘調査を実施しました。この地点からは、続縄文文化や擦文文化の遺構・遺物が発見されています。とくに続縄文後半の後北C2-D期に属する遺構・遺物が多数発見されています。今回の報告会では、同地点で得られた発掘調査の成果を発表するとともに、続縄文文化のなかで後北C2-D期とはどのような時期であったのか、その生業や交易、社会についてご講演をいただく予定です。

当日の予定

13:00 開場
13:30 開会
第I部 調査成果報告
13:35-13:50 高倉 純 (北海道大学埋蔵文化財調査センター)
「2024年度における調査研究の成果」
13:50-14:30 守屋豊人 (北海道大学埋蔵文化財調査センター)
「K39遺跡こども本の森地点の調査」
14:30-14:40 休憩
第II部 講演
14:40-15:30 鈴木 信
(公財)法人北海道埋蔵文化財センター)
「後北C2-D式期の頃—続縄文といつ時代とは—」
15:30-16:00 質疑応答・討論
16:00 閉会

参加について

※事前申し込みは不要です。
当日、直接会場までお越し下さい。
会場: 北海道大学学術交流会館第1会議室
(札幌市北区北11条西7丁目)
参加費: 無料

主催・問い合わせ先

北海道大学埋蔵文化財調査センター TEL 011-706-2671
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目 FAX 011-706-2094
E-mail: hokudaimabun@gmail.com



編集後記

構内の遺跡では、複数時期の遺構・遺物が残された地点(複合地点と呼称)を調査する際、時間がかかる場合が多いです。

調査範囲が複合地点に隣接するか否かを事前に把握することは、調査の手順や積算を効率的にするため必要です。(守屋)

北海道大学埋蔵文化財調査センターニュースレター第49号

発行: 北海道大学埋蔵文化財調査センター
〒060-0811 札幌市北区北11条西7丁目

電話: 011-706-2671 FAX: 011-706-2094

e-mail: hokudaimabun@gmail.com

URL: <http://mai.bun.facility.hokudai.ac.jp/>

印刷: 柏楊印刷株式会社

北海道大学 Hokkaido University Archaeological Research Center News Letter 埋蔵文化財調査センター ニュースレター

特集 繰り返された選定地

構内の遺跡には、累積された地層を精査すると、何度も生活の場として選定された地点が含まれています。考古学的見地から、縄文文化、続縄文文化前半、続縄文文化後半、続縄文文化末、擦文文化、アイヌ文化期と便利的に時期区分し、累積された地層での分析を当該地点で試みると、遺構・遺物が確認されない地層を挟んで、その上下の層で、各時期の遺構・遺物がみられます。放射性炭素年代測定法の結果に基づくと、同一地点で確認された、複数時期の生活痕の反復には、概ね、数百年の年代差があるようです。

何度も生活の場として選定された地点は、河川氾濫が発生し、当時の人々が各地点を離れた後、河川に隣接した高まりが徐々に再生され、その高まりで安全に人々が暮らした結果を示している可能性があります。

本特集では、数百年間隔で繰り返し選定されたと位置づけられる地点を集成して、紹介します。

標高 16.0m ライン



▲ K39遺跡こども本の森地点で確認された地層断面(調査区の東壁)

本地点の調査では、2a2層で擦文文化の遺構、2b層で続縄文文化後半の遺構、8層および12層で続縄文文化前半の遺構が発見された。上の写真では現地表面から約3mの深さまで調査した地層断面を示した。地層の写真では細線で各層の境目を記している。放射性炭素年代測定の結果に基づくと、12層と8層の間に約300年、8層と2b層の間に少なくとも約200年、2b層と2a2層との間に少なくとも約400年の隔たりがみられる。数百年単位で繰り返された土地利用が本地点で明らかとなった。

繰り返された選定地



番号	地点名※01	時期	年代	立地	文化層評価※02	主要遺構	主要遺構数(基)	報告書名	備考
1	K45 遺跡 南新川国際交流会館外構地帯	縄文	約13世紀	高まり	集落	堅穴住居址	1	北大構内の遺跡 19 2012 北海道大学埋蔵文化財調査室	
2	K39 遺跡 國際科学イノベーション拠点施設地帯	縄文後半	約16世紀	埋没河邊	遺物散布地	—	—	北大構内の遺跡 22 2016 北海道大学埋蔵文化財調査センター	
3	K39 遺跡 第2農場倉庫地帯	縄文後半	約1世紀	高まり	遺物散布地	—	—	K39 遺跡第9次調査 2002 札幌市教育委員会	
4	K39 遺跡 エルムトンネル地帯	縄文前半	約1世紀	高まり	キヤンブ地	炉址	1	K39 遺跡第6次調査 2001 札幌市教育委員会	
5	K39 遺跡 恵迪寮地帯	縄文	約8世紀～約13世紀	高まり	集落	堅穴住居址	55	K39 遺跡第1次調査 1986 北海道大学	
6	K39 遺跡 工学部共用実験研究棟地帯	縄文	約6世紀	傾斜地	キヤンブ地	炉址	12	K39 遺跡工学部共用実験研究棟地帯発掘調査報告書 2011 北海道大学埋蔵文化財調査室	
7	K39 遺跡 北生物園フィールド科学センター実験実習棟地帯	縄文後半	約3世紀～約5世紀	高まり	遺物散布地	—	—	北大構内の遺跡 29 2023 北海道大学埋蔵文化財調査センター	
8	K39 遺跡 農産製造実習室新営工事地帯	縄文末期	約5000年前	高まり	遺物散布地	—	—	K39 遺跡工学部共用実験研究棟地帯発掘調査報告書 2011 北海道大学埋蔵文化財調査室	確認調査の結果、埋蔵文化財は地中で保存された。
9	K39 遺跡 南キャンパス理学部地帯	縄文末期	約6世紀	高まり	キヤンブ地	土坑	1	北大構内の遺跡 24 2018 北海道大学埋蔵文化財調査センター	確認調査の結果、埋蔵文化財は地中で保存された。
10	K39 遺跡 共同溝中央道路地帯	縄文	約1世紀	高まり	遺物散布地	—	—	北大構内の遺跡 10 1995 北海道大学	
11	K39 遺跡 薬学部研究棟地帯	縄文後半	約3世紀～約5世紀	高まり	遺物散布地	—	—	北大構内の遺跡 16 2009 北海道大学埋蔵文化財調査室	
12	K39 遺跡 人文・社会科学総合教育研究棟地帯	縄文後期	約2500年前	高まり	集落	堅穴住居址	3	北大構内の遺跡 16 2009 北海道大学埋蔵文化財調査室	
13	K39 遺跡 付属図書館本館再生整備地帯	縄文前半	約1世紀	高まり	キヤンブ地	土坑	25	K39 遺跡人文・社会科学総合教育研究棟地帯発掘調査報告書 I 2004 北海道大学	
14	K39 遺跡 農学部実験実習棟地帯	縄文末期	約6世紀	高まり	遺物散布地	—	—	北大構内の遺跡 19 2012 北海道大学埋蔵文化財調査室	
15	K39 遺跡 こどもの森地帯	縄文前半	約1世紀	高まり	キヤンブ地	土坑	20	北大構内の遺跡 22 2016 北海道大学埋蔵文化財調査センター	
16	K39 遺跡 植物園収蔵庫地帯	縄文	約8世紀	高まり	集落	堅穴住居址	4	北大構内の遺跡 18 2011 北海道大学埋蔵文化財調査室	

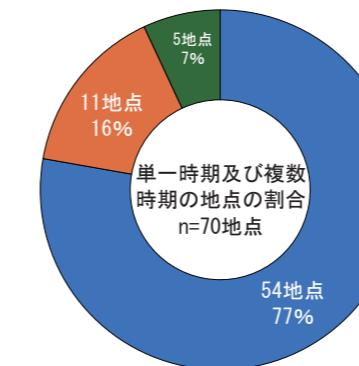
※1: 主要遺構および遺構数が不明。※01: 遺物が河川氾濫によって運ばれたと判断された地点は、除いている。※02: キヤンブ地とは一時的な活動（炉址・土坑の利用）の場所、遺物散布地とは土器片などの遺物が発見される場所（遺構が確認されない）、集落とは人が集まっている場所（堅穴住居の利用）を意味する。

繰り返された選定地の時期

構内で調査された地点では、一地点で遺構・遺物包含層が複数の時期に分かれて確認された事例が約20%みられます。考古学的見地から、縄文文化、続縄文文化前半、続縄文文化後半、続縄文文化末、擦文化、アイヌ文化期と便宜的に時期区分し、各地点で残された遺構・遺物の時期を確認すると、総数70地点（2024年12月現在）の内、複数時期の遺構・遺物が上下の地層で確認された事例は16地点となります（内訳：複数時期（2期）が11地点、複数時期（3期）が5地点）。

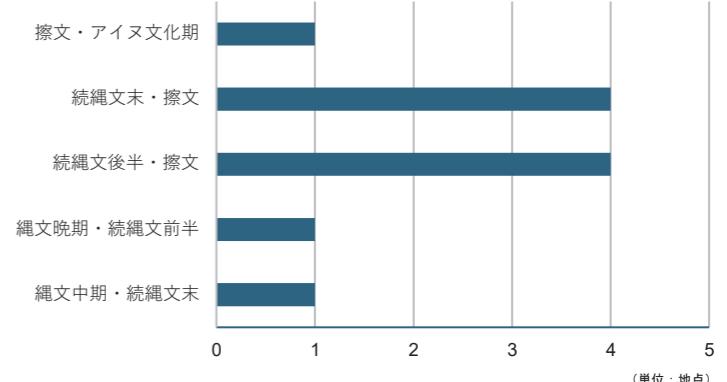
複数時期（2期）を取り上げると、遺構・遺物包含層が一地点で繰り返し発見されている傾向は、続縄文文化後半および続縄文文化末と擦文化との間で多く見られます。

同じ傾向は複数時期（3期）でも指摘できます（2頁表を参照）。



- 単一時期の地点
- 複数時期（2期）の地点
- 複数時期（3期）の地点

■ 単一時期及び複数時期の地点の割合
n=70地点



（単位：地点）

▲構内遺跡で確認された複数時期の地点

便宜的時期区分の内、一つだけの時期の場合は単一時期、2つの場合は複数時期（2期）、3つの場合は複数時期（3期）と呼ぶ。

生活の安全に適した地点

複数時期（2期もしくは3期）の地点として取り上げた計16地点は、何ゆえに複数回の活動が異なる地層で残されていたのでしょうか。

北大構内が立地する扇状地末端は、縄文海進が終わった以降、河川の蛇行によって土砂が運ばれてくる頻度が高く、大きな氾濫などが頻繁に生じていたと考えられます。

また、計16地点では、数百年間隔で集落やキャンプ地が残されていたと、発掘調査および放射性炭素年代測定の結果から分かっています（2頁表を参照）。

上記のことから、河川氾濫などで地形が変わり、各々の地点を人々が離れた後、河川に面した高まりができ、安全で、活動しやすい場所と当時の人々が判断できる地形になったため、数百年後に遺構が計16地点で残されたと考えられます。

繰り返された選定地の密度

複数時期（2期）、複数時期（3期）の地点は、サクシユコトニ川およびセロンペツ川の両岸で点在しているといえます（2頁地図を参照）。

複数時期（3期）の地点を取り上げると、サクシユコトニ川とセロンペツ川の合流点周辺のエルムトンネル地点（2頁表の4番）、恵迪寮地点（2頁表の5番）、セロンペツ川の右岸に確認された北方生物圏フィールド科学センター実験実習棟地点（2頁表の7番）、サクシユコトニ川中流域左岸（現大野池周辺）の共同溝中央道路地点（2頁表の10番）、サクシユコトニ川上流域右岸のこどもの森地点（2頁表の15番）では、遺構・遺物の確認された地層を精査した結果、複数時期（3期）の地層が累積していると分かっています。

複数時期（3期）の地点周辺で調査を実施する際は、慎重な精査が望まれます。